



朝鮮通信使迎接施設に関する研究 —対馬市厳原町について—

K01083 羽田 理悦子

I はじめに

I-1 研究背景・目的

昨今日本において、韓国ドラマに始まる韓流ブームが起こっている。日本から韓国への観光客が増え、文化の交流が盛んに行われてきている。

江戸時代の鎖国下においても、日本は李氏朝鮮と唯一正式な国交関係を保っていた。李氏朝鮮から日本に送られてくる使節団が朝鮮通信使である。その一行は毎回300～500人に及び、道中各地の都市整備や、施設計画に与えた影響は大きい。しかし、日韓両国で朝鮮通信使について歴史的評価は行われているが、建築史や都市史の面からの評価はあまりなされていない。

今回取り上げる長崎県対馬市厳原町においても、日本最初の迎接地であるにもかかわらず、建築史的視点からは解明されていない。そこで、対馬における迎接施設を明らかにし、当時の建物の復元並びに、現存するものにおいては歴史的価値を見出ししていきたい。

I-2 研究方法

(1) 対馬における朝鮮通信使迎接施設の調査

対馬の迎接施設を明らかにし、現存状況を調べる。

(2) 厳原における朝鮮通信使迎接施設の調査

①西山寺山門の実測調査

現在西山寺には対朝鮮外交機関「以訥庵」の山門が現存する。実測調査により通信使迎接施設の建築的基本資料を作成する。

②海岸寺の実測調査ならびに東照宮(御影堂)の復原

海岸寺本堂は対馬に明治初めまであった東照宮(御影堂)を移築したと伝えられている。この建物を調査することで、迎接施設が殆ど残っていない厳原における海岸寺の歴史遺産としての評価を見出したい。

また、御影堂であった頃の状態に復原する。

③文化8年の易地来聘の際の厳原における通信使客館

の平面構成を明らかにする。

II 調査対象

II-1 対馬と朝鮮通信使

古代から交流のあった朝鮮。対馬では日本本土よりも朝鮮半島に近い地理的位置を利用して、古くから朝鮮との交易を営んできた。14世紀以降、倭寇の統制をきっかけに対馬の島主宗氏は独自の交流を朝鮮との間に持つようになり、16世紀に入ると、独占的な日朝貿易が始まる。しかし、豊臣秀吉による二度の朝鮮侵略により交流が途絶えてしまう。これは宗氏にとっては死活問題であり、宗氏は何度も繰り返し使者を送るなどして、国交回復を目指した。徳川家康の時代から国交が回復され、将軍の代が替わった時や世嗣が生まれた時などに、朝鮮国王の親書をもって日本を訪れた。この友好使節団が朝鮮通信使である。江戸時代、慶長12年(1607)から文化8年(1811)の200年余りの間に12回来日している。国をあげての壮大なイベントであったとされる。通信使の経路はまず船で日本の対馬に渡り、瀬戸内海を経由して大阪に上陸し、中仙道から東海道を陸路として江戸まで往復するというものだった。

来聘の順序として、幕府の命を受け対馬が朝鮮に対し派遣の手続きを取り、参判使が釜山まで出迎える。それに対し国書を奉じた通信使が船でまず対馬の鰐浦港・佐須奈港に着く。南下して宗家の城下厳原に入り、宿泊し、宗氏の接待を受けたのち、宗氏と以訥庵僧、警護・先導役の武士を同伴し幕府に向かうというものであった。対馬藩は日朝関係で特別な位置付けを持っていたといえる。

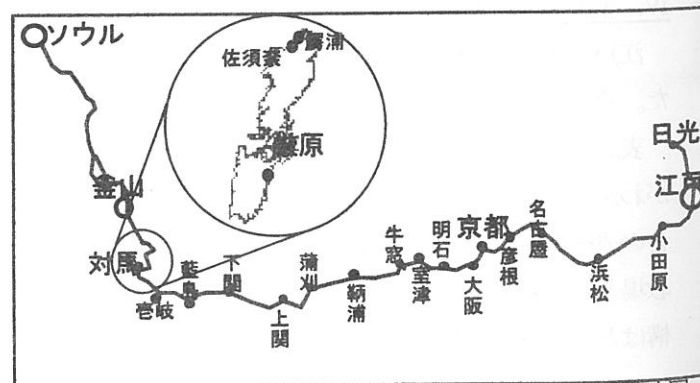


図1 通信使往来図

II-2 厳原町について

厳原は宗家が対馬の峰町佐賀から文明18年(1486)年に厳原の金石城に移館以来、明治維新まで、380年間の城下町である。朝鮮との文化・貿易の窓口として栄え、朝鮮通信使は必ず現在の厳原を経て江戸に向かった。12回目の来日の際は、江戸まで行かずに、厳原の棧原屋形において国書の交換が行われた(易地来聘)。

城下の町づくりが本格的に行われたのは、棧敷原に屋形が新しく造営された寛文の頃である。その時に道路を改め、町割りが行われた。港から、北にある棧敷原屋形にまっすぐに伸びる馬道筋という大通りが貫通した。通信使はこの馬道筋を通って棧原屋形に向かった。また棧原屋形は天守閣がなく、公家風の造りだったという。軍事的役割を持たない棧原屋形と、この開放的な馬道筋をみると、外的に備えたのではなく、隣国との友好的な外交を考えた町づくりであったといえる。

II-3 対馬における迎接施設の現状

以下に朝鮮通信使の対馬における宿泊施設、立ち寄った施設、関連のある施設の現存状況を示す。

[表1] 対馬における迎接施設

滞在地	関連施設	現存状況
佐須浦	客館	×
鰐浦	宝蔵寺	△
西泊浦	西福寺	△
対馬府中(厳原)	万松院	本堂△ 山門○
	東照宮	本堂× 門×
	海岸寺	本堂●明治期に東照宮(御影堂) [寛政4年築] を移築 山門○
	以訥庵(現西山寺)	本堂△現西山寺本堂(大正期再建)山門○
	西山寺	×
	国分寺	本堂△ 山門○
	客館	×
	長寿院	△
	太平寺	△
	光清寺	△
	慶雲寺	△
	流芳院	×
対馬府中(厳原)	海晏寺	×
	善応寺	×
	棧原城	×
	金石城	屋敷× 城櫓△

[注] ○当時のまま ●当時の建物を移築

△再建 時代記載のないもの明治以降再建 網掛け 実測調査対象

II-4 厳原における迎接施設

図2 対州接鮮旅館図は文化初年推定の町絵図に文化8年の来聘に来島する幕府役人が誰の屋敷を宿舎にするかを示すために作られた絵図である。以下に、II-2で示した厳原の施設の場所を地図上に示す。記載のないものも、現在の地図と照らし合わせ場所を示した。

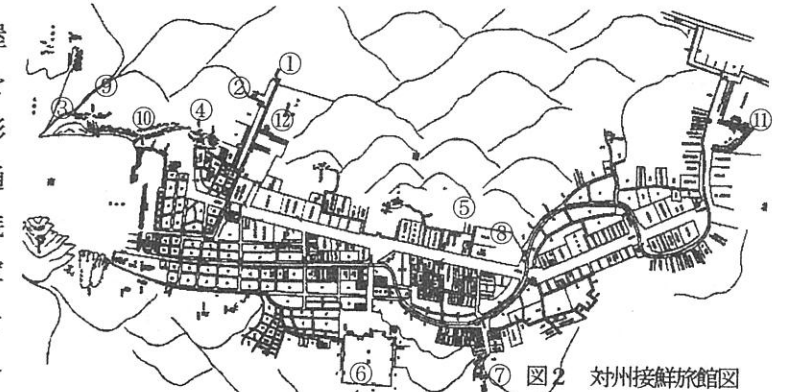


図2 対州接鮮旅館図 (国立公文書館蔵)

- ①万松院 ②東照宮 ③海岸寺 ④以訥庵 ⑤西山寺
⑥客館 ⑦長寿院 ⑧太平寺 ⑨光清寺 ⑩慶雲寺
⑪棧原城 ⑫金石屋形

III 実測調査

III-1 西山寺(以訥庵跡)

西山寺

天安2年(857)この地に大日堂を建立したのが始まりで、永正9年(1512)西山寺と改めた。享保17年(1732)から慶応末年まで対朝鮮外交機関「以訥庵」となり、瑞泉院に移る。慶応末年、西山寺に復する。

以訥庵

対朝鮮外交機関。対朝鮮外交文書の作成、朝鮮からの文書の和訳など、外交文書の管理をしていた。

天正8年(1580)博多聖福寺の景徹玄蘇が外交僧として対馬へ招かれ、慶長16年(1611)に府中扇原に寺を建立した。その後、天和3年(1683)日吉に移り国分寺の屋敷を引き継ぐ。享保17年(1732)大火で類焼し現在地の西山寺に仮居、慶応2年(1866)廃寺となる。

山門

この地に以訥庵が建てられていた頃のもので、現存する数少ない遺構である。

屋根は切妻造・本瓦葺で門の両脇に居室部を持つ長屋門形式である。扉は両開きで、右側に潜り戸がつく。

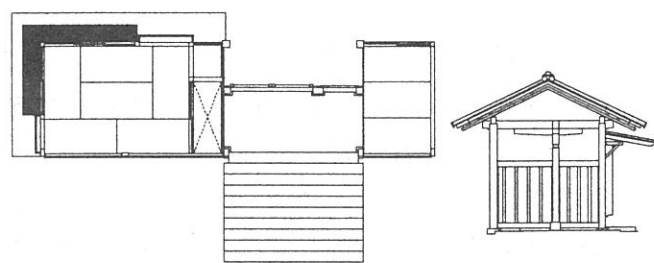


図3 西山寺山門平面図

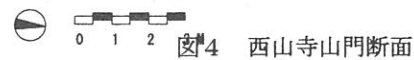


図4 西山寺山門断面図

絵図中の以酏庵

右、図5は文化8年の易地来聘の際、草場珮川がその応接に随行し、見聞を記した『津島日記』の中の挿絵であり、以酏庵が描かれている。山門も描かれており、この絵図に見られる山門が現存する山門と考えられる。

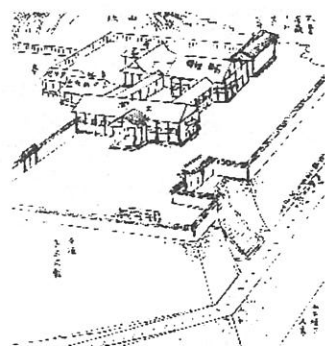


図5 『津島日記』以酏庵図

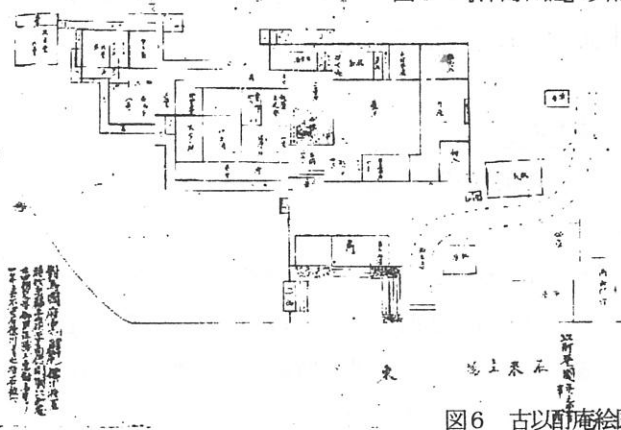


図6 古以酏庵絵図

(建仁寺両足院所蔵)

上、図6は以酏庵の平面構成を明らかにする絵図であり、山門も今と同じ位置、同じ構成をしている。左下に「対馬府中(明治年中ヨリ改厳原)徳川将軍時代京都五山…」とあることから、明治期に描かれたものと推測される。

Ⅲ-2 海岸寺

海岸寺

文明8年(1470)根誉上人が与良浜須瀬路に建立したのが始まりで、天正8年(1580)に今の地に移した。現在の本堂は寛政6年(1794)築の御影堂を明治16年に移築したもの。門は元和9年(1623)築の潮光庵の門を寛文7年(1667)に移したものである。

東照宮(御影堂)

正保2年(1645)対馬に東照宮を勧請し、社を金石山に造り、御影堂と称した。寛永12年(1635)対馬主宗義成が徳川家光から与えられた徳川家康の画像御神体として祀ったものである。のち、境内を広めて、慶安元年(1648)新宮を造ったが、元禄14年(1701)炎上したので、寛政6年(1794)万松院の南に再建。明治維新後廃社となって、一部は海岸寺の本堂として残っている。

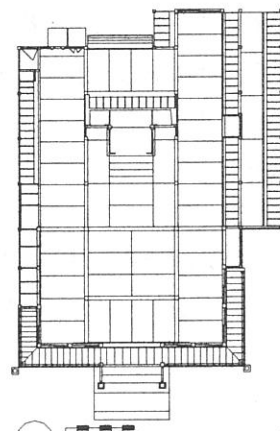


図7 海岸寺本堂平面図

海岸寺本堂

屋根は東面3間入母屋造本瓦葺、西面は切妻造棧瓦葺で、平面構成は内陣・外陣に分かれる。



図8 海岸寺本堂 断面図

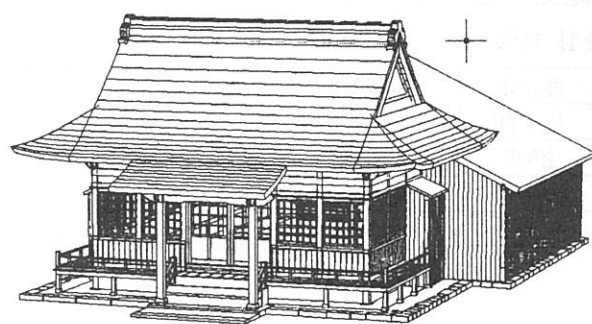


図9 海岸寺本堂 現状図

海岸寺本堂痕跡図及び樹種

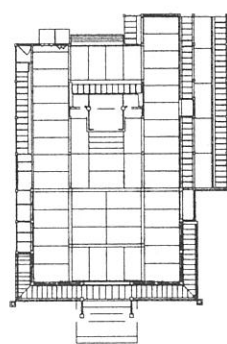


図10 海岸寺本堂痕跡図

今まで、東照宮を移築したとだけ伝えられていて、どのような移築であったかは明確ではなかった。図10に示した丸で囲まれた柱は樺であり、他の柱はすべて松である。このことから、本堂の前面3間、向拝柱、内陣来迎柱が移築部分と考えられる。また横架材は松であることから、そのまの形での移築ではないことが判明した。

Ⅳ 東照宮(御影堂)の復元

宗家文書の『万松院御宴席之式』の中に朝鮮から訳官使が来た時の東照宮での参拝の仕方が描かれている。残念ながら柱の表記はない。この資料、また他の絵図を参考にして御影堂の姿を復元した。

絵図や海岸寺本堂の痕跡図より以下のことを推測した。

- ・ 境内は、鳥居を二つ通った所に石段があり、唐門を通り、一段高くなった所に社殿がある。
- ・ 本殿と拝殿をつなぐ幣殿に「大般若経之箱」と書かれているため、幣殿は内部であり、本殿と拝殿を石の間でつなぐ権現造りである。
- ・ 本殿の所に「御神前」とあることから、本殿自体は描かれていない。
- ・ 海岸寺の内陣来迎柱と、花頭窓の作りが丁寧で収まりがよい為、来迎柱間の柱間で本殿梁行は建てられていた。

以上のことにより、平面図を復元し、海岸寺の高さ、組み物を参考にして御影堂を3Dに立ち上げた。

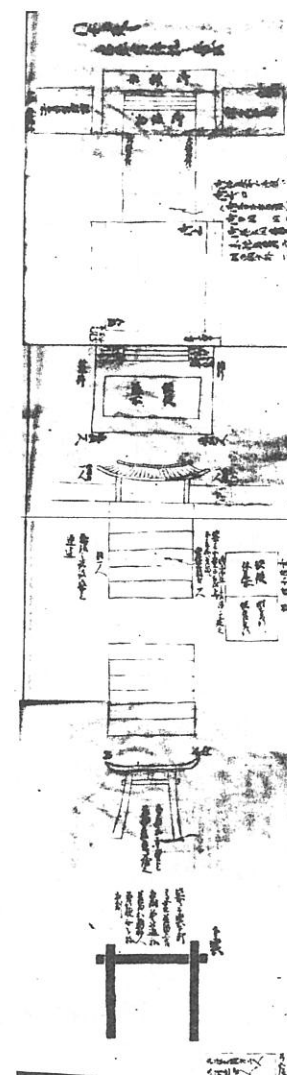


図11 『万松院御宴席之式』御影堂図

御影堂図

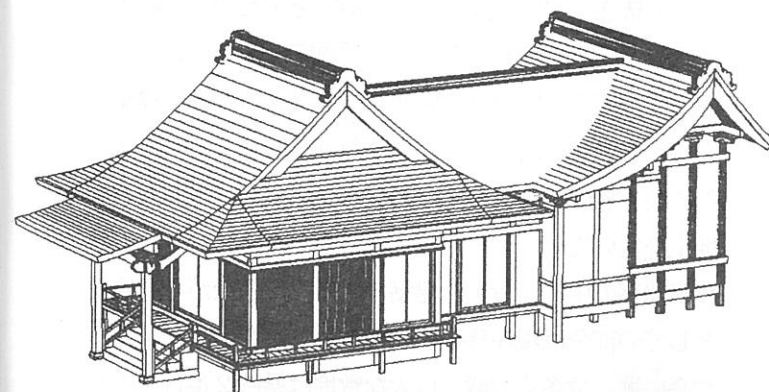


図12 東照宮(御影堂)復元透視図

Ⅵ 文化年間の厳原における迎撃状況について

朝鮮通信使最後の来聘は厳原において国書が交換された。この迎撃の為に国分寺に新しく信使客館が設置され、馬道筋通りの家の門や石垣が整備されるなど、迎撃に向けて大規模な土木工事が行われた。

客館平面構成の分析

宗家文書『客館御普請出来方張』は文化年間の客館について建築的に述べられている。これを『津島日記』客館図に照らし合わせて平面構成ならびに部屋割りを考察する。

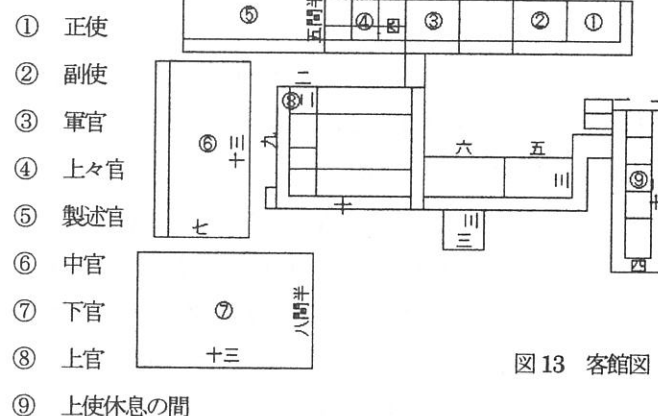


図13 客館図

以上のように推測され、かなり大規模な施設を通信使迎撃のために作ったことが伺える。

Ⅵ 結論

- ・ 朝鮮外交の実務を任されていた対馬藩にとって朝鮮通信使が町づくりに与えた影響は大きい。
- ・ 対馬における朝鮮通信使関連施設は20箇所にあつたが、現存するものは4箇所であり、現存する遺構は数少ない貴重なものである。
- ・ 朝鮮通信使の遺構である海岸寺は今回の調査により、御影堂をそのまま移築したものではないことが判明したが、当時の姿を元に造ったものであると考えられ、当時の面影を残す貴重な遺構であることは確かである。

日本最初の迎接地であつた対馬、特にその城下町厳原において、朝鮮との交流が与えた影響は多大であつたといえる。

<参考文献>

- 『影印本 津島日記(草場珮川日記別巻)』 西日本文化協会発行
- 『新対馬島誌』 新対馬島誌編集委員会発行
- 『厳原町誌』 厳原町誌編集委員会編 厳原町発行
- 『万松院御宴席之式』 宗家文書
- 『客館御普請出来方張』 宗家文書